
奪ってなお、廻る物語

チキン執事

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奪つてなお、廻る物語

【Nコード】

N5320Z

【作者名】

チキン執事

【あらすじ】

彼はおかしくはない。ただ、感情が薄いだけで。

彼は壊れてはいない。壊れかけているだけで。

彼は強いわけではない。ただ、そうなっているだけで。

彼は、まともな訳じゃない。そうあろうとしているだけで。

彼は、ノーマルな訳じゃない。アブノーマルな訳じゃない。

——ただ、過負荷なだけで。

母の愛。そして生まれたモノ（前書き）

さあて、やっちまいましたノリ投稿。

フツとね？考え付いちゃったんですよ。

まあ気が向いたら読んでくださいこの駄作！

名前が厨2臭いのは気にしないで下さい！

では、どうぞ！

母の愛。そして生まれたモノ

彼は、昔から引っ込み事案だった。

まあ家から一度も出たことのない彼からしたらどうでもよいことなのだが。

きつと何を言われても渡して、普通の子供のように何かが欲しい何てきつと言わないだろう。

でも、

彼にも欲しいものが一つだけあった。

母の愛。

ただ、それが、それだけが。

でも、彼はそれを貰えなかった。

何故なら

彼の母は、一人の男に愛を、全てを捧げていたから。

彼の母——彼女はその男に騙されている事を承知で、愛していた。

金を貢ぐために身体を売って。彼と共に薬に溺れて。

いつまでも、彼女は狂っっているがら愛していた。

そして、その歪んだ愛の塊——彼が生まれた。

なのに、貰えたのは『痛み』だけだった。

薬のせいでガリガリ痩せ細り、呂律もまともに回らないで、見た目はそんななのに。

彼はそれすらも愛した。

母から来るものは何でも愛した。

痛み、苦しみ、熱さ、罵り——受け入れた。

廻って、痛んで、廻って、痛んで、廻って。

そして、変わった。

ついに、変わったのだ。

彼が恋してやまなかった、生まれながらにしてずっと待っていたもの。

母の愛。

薬のせいで禁断症状の時は沢山嫌な思いをしたが、薬を打った後は『母親』だった。

優しく抱き寄せてくれる大きな腕。優しい声色。

全てが自分のものになった。

だから、全てが壊れた。

グツ
チャ
グツ
チャ
グツ
チャ。

鈍く輝く何かが母の身体を何度も突き刺すような、そのたびに瑞々しくなっていく音。

ゴギン。

優しく、暖かかった母の腕から鳴る鈍い音。

ア
……
ゲア
……
カア
？

あの優しかった母の喉から聞こえた母のものとは信じたく無いほどの醜い声。

「あひや……へへへ……ああああはははははははははは！お前がア……お前が悪いんだあ！！お前が奪ったからこうなったんだあ」

狂ったように笑った後、男はそう言った。

奪った？ウバツタ？何を？母を？僕が？何が？

頭が、真つ白に為る。

もう無いのだ。

温かさが。

母『だったもの』に触れた。

違う。暖かくない。

腕が違う、からだが違う目が違う色が違う。

ただ、未だ溢れ出る赤い液体が生暖かった。

男が、先程の母を違うものに変えた鈍く輝く何かを、自分に向けて振りかぶって、終わった。

ドドドドド。

何かが、入ってきたのだ。

ドドドドド。

足音が重なる。

ドドドドド。

黒服の人達が男を取り囲んだ。

「警察だ！動くな！」

黒服が何かを言っているが、まるで遠くに居るかのように聞こえた。

ギュー。

何かが体に絡み付く。

見ると、黒い人が自分に絡み付いていた。

そこにあつたのは、熱。

暖かさではない、熱。

少し似ていたが、少し違った。

ただ、うる覚えだからあまり覚えてないけど、

「君は……私が護るよ……」

この言葉だけは、覚えている。

そして熱が、少し冷めて暖かくなった。

ああ始まる。

終わったのに、また始まる。

廻る。

これは全てを奪ってしまう少年の、少し暖かな物語。

始まるのだ。

奪わない為の、物語が。

母の愛。そして生まれたモノ（後書き）

そしてめだか達の参戦は未だない。

まあ、気長にいきましょう。行かせてください。

では、今日はこの辺で。

誕生。そして始まり（前書き）

第二話投下です。

どうなるんでしょうね、これから。

私にも分かりません。

何故ならまだ名前すら決めてないから！（ヲイ

誕生。そして始まり

それから三年。

僕は『生きていた』

異常な現象を回りに起こしながら。

僕はあのととき一人の警察——今の父に当たるわけだがその父に拾われ、裕福でもなく貧乏ななけでもない、しかし満足のいく生活を送っていた。

思えばいつからだっただろう。

周りのモノを奪ってしまっているのは。

小学二年生、いつものように授業を始めようとすると、一人の男子が手を上げた。

どうやら筆箱が無くなってしまったらしい。

僕は別に嫌われている、とかがなかったから手伝った。

そして、見つかった。

僕の机のなかから。

最初はいたずらだと思った。

でも、だんだんとそれはおかしくなっていき、ついに父は僕に病院へ行こう、そう言った。

——・・・みたいな不思議な力を持つてるかもしれない子供たちが集まった病院なんだぞ？仲良くな。

父はそう言った。

僕の頭をわしゃわしゃと力強く撫で、笑った。

——ちつとも嬉しくなさそうな顔で。

僕はそんな父さんの顔を見たことがなくて、知らなくて怖かった。

だから、父の言うことはなんでも聞いた。

そして、父の運転する車に揺られ、ようやくその病院にたどり着いた。

中に居たのは、子供。

でも違う。

明らかに——異質。

雰囲気、オーラが、見た目が。

——ほらほら、ちゃんと皆に挨拶をするんだぞ？じゃ、父さん、ちよっとお医者さんと話してくるから、ちゃんと待ってるよ？

うん、分かったよ父さん。挨拶もするしちゃんと待ってるよ。

父さんはそれを聞くと向こう側に歩き出す。

そして僕も言われたことを護るため行動に移した。

「こんにちは、皆さん。僕の名前は、……。みんなの名前は？」

すると周りから色々な声が飛んでくる。

「——」「——」「——」「——」

「へえ、そういう名前なんだあ。うん。みんな宜しく！」

そう言つと、飛び交う雑音の中にそれに混じらない言葉が溢れた。

「——下らない」

そちらを向くと、一人のおかっぱの女の子が居た。

「……………。どうして？」

僕はたまらず、そう聞いた。

別に放っておいても良かった。でも、見るに耐えなかった。

目が。

まるで全てを諦めるかのような、突き放すような、無意味なような

そんな目。

「そうだろ？私だって、貴様だって。無意味に生まれて無関係に生きて無価値に死ぬに決まっているのだ」

——正直、その言葉は響くものがあつた。

無意味に生まれて無関係に生きて無価値に死ぬ。

心に響いた。

でも違う。

「それは少し違うんじゃないかな？えーっと……」

「黒神、めだかだ」

「……じゃあめだかちゃん？」

「その呼び方止めろ」

えー！。と内心ため息をつく。

「じゃあめだかちゃんさんで」

「……………もういい」

「うん。じゃあ話を戻すね。めだかちゃんさん。『無意味に生まれて無関係に生きて無価値に死ぬ』僕も胸を打たれたよ。多分……あのままだったらきつと僕もそう思った」

「……で？」

「うん。めだかちゃんさんはさ、きつとまだ『産まれてないんだよ』」

それを言うと、めだかちゃんさんは『は？』と言う顔をした。

「私は生まれているぞ。現にここに……」

「じゃあしたいことはある？」

「……ない」

「ほらね？……じゃあそこから始めてみなよ」

「……始める、だと？何を？どうやって？」

「始めるんだよ。めだかちゃんさんを。最初っから」

手を、差し伸べる。

めだかちゃんさんはひとしきり悩んだ後、手をとった。

「——ちゃん。三番の検査室に入ってくれるー？」

看護婦さんの声が聞こえて、また消えた。

僕はそうして、扉に近づいた。

見るからに鍵が掛かってますよと言いたげな扉。

「——何をしている?」

めだかちゃんさんの声が聞こえた。

「うん。ちょっとね、ここ出たいな、何て」

無理だよね。と言おうとしたときだった。

ガチャガチャ……カチン。

ものの三秒弱。扉が開いた。

「開いたぞ、扉」

さも当たり前のように針金で扉を開き、こちらを向いた。

「——良い大人にならないねって言おうと思ったけどめだかちゃんさんナイスかも!」

そして彼女の手をとり、走り出した。

「え? なっ!? き、貴様! どこにつれていく!」

「知らない」

キッパリと言ってやる。

「——僕も知らないような場所にだよ」

後ろから慌てた看護師の声やお医者さんの声が聞こえる。

でも気にしない。

「め、めだかちゃんさん？このままは、走ってくれる？ば、僕もう疲れ——」

「きつ！貴様！自分から連れ出しておいてそれが！ってまてまてまて！分かった！倒れるな、ほら！掴まれ！」

思えば小学二年生で女の子の背に揺られる。何て珍しい体験だろう。

「…………ふう。疲れた。じゃあめだかちゃんさん号出っ発ー！」

「調子に乗るなああああ！ー！」

十分後。

たどり着いたのは漢字がめんどくさくて読めな——「託児所だ」……らしい。

どうやらここは子供を預けるような場所らしくて、ここには一人の男の子が居た。

カチャカチャ、カチャカチャ。

男の子が指で弄るぐにゃぐにゃした物が、音をならす。

「うーん。ここはこつ？……………うえ？違つ……………あ、こつち！……………違つ」

見ている僕らは助けたくてうずうずしてどうしようもない。

「——ああ！もう！」

そんな声が隣から聞こえた。

ずかずかと、男の子の方へいくめだかちゃんさん。

「おい、そんな簡単なパズルにどうして戸惑っている？貸せ。私がやってやる」

そう言って彼女はパズルをとり、一瞬で解いた。

「ほら、解けたぞ」

ぽいっと投げ渡す。

それを見た男の子は

「うわぁ！凄いや！どうやっても解けなかったのに！ありがとう！すっごく嬉しいよ！」

「……礼には及ばない。私にとっては取るに足りないことだ」

「じゃあさじゃあさ！これも解いてよ！」

男の子がそう言っとめだかちゃんさんはそれを受け取り素直に単純に当たり前前に解いていく。

うわぁ……本当に凄いや。何てこんなに解けるの？だって明らかにこれ――。

異常じゃん。

「うわぁぁぁ！本当に全部解いちゃった！すごいすごいすごい！君はすごくすごいや！」

「……凄くなんかない。それに凄くたって何にもならない。私が生きてることに、私が生まれたことに、なんの意味もないのだから」

「えー？そうかなあー？この世に意味のない事なんてないと思うけど？」

「……………。だったら私に教えるがよい。私は何のために生まれてきた？」

「あはっ！そんなことは簡単だよ！会ったばかりの僕をこんな嬉しい気持ちにしてくれた君なんだ――」

そして、言った。

人生が、変わる一言を。

「君はきつと、みんなを幸せにする為に生まれてきたんだよ！」

「私が？人を幸せに？」

「うん！そつだよ！」

「……出来るのか？」

「出来るよ」「」

男の子と僕の声が重なる。

「実はね……僕、今までこんな話せなかったんだ。怖くて、でもね……めだかちゃんさんと今こうやって話せるのは、めだかちゃんさん、きみのお陰だよ」

「……………む」

「君はもう、こんなに僕を幸せにしてくれたんだ。だから、もし、君がそれを望むのなら、僕はそれのお手伝いをしたい」

「……………わかった」

そして、目が変わった。

めだかちゃんさんの目があの光を称えていない目に、光が灯った。

そして、

「私は決めたぞ！私はこれから——」

多分これが、この瞬間が——。

「人を助けるために生きるッ！」

『黒神めだか』の誕生だろう。

誕生。そして始まり（後書き）

とりあえずめだかちゃんになったところから始めてみました。

次の次当たりから時間軸がすごいことになりますのでご了承を。

そしてご感想、こうしたほうがよくね？とかじゃんじゃん宜しくです。

あ、訂正案もお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5320z/>

奪ってなお、廻る物語

2011年12月18日12時48分発行